ARTKISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum,Kumamoto
熊本市現代美術館発行 http://www.camk.or.jp [季刊 2006.夏号] vol.27

反近代の逆襲Ⅱ
生人形と江戸の欲望展

開催期間:2006.6.24－10.22 安本亀八≪相撲生人形≫(1890) 熊本市現代美術館蔵

Museum information

安本亀八《相撲生人形》熊本でまもなく公開

さる4月27日、次の展覧会「生人形と江戸の欲望」展の目玉作品となる安本亀八《相撲生人形》を報道関係者に紹介しました。組み立て図はなく、以前の写真を頼りにしながらの初めての作業です。二人あわせて13パーツからなり、頭部等を除き、ほぞをスライドさせるはめ込み式。寄木造りで、中は空洞のため、見かけよりも軽く、全体でわずか47キロ、そして3本の足でバランスよく支えていることがわかりました。手足のはめ込み、着衣の手順を確認しながら、およそ2時間で完成しました。迫力のあるこの作品、展覧会でぜひご覧下さい。

＊5月1日よりリニューアルした当館ホームページの「CAMK Blog（キャンク・ブログ）」でも「生人形と江戸の欲望」展準備中の最新情報を次々と紹介する予定です。

CAMKレクチャーカレッジ1 「アン・ハミルトン 記憶と反記憶」2006.3.5

当館館長の南嶌宏が、今回の展覧会の全体像についての想いを話しました。これまでのアン・ハミルトンさんの大きなテーマでもある、普段は消えて見えなくなってしまっている人間の様々な記憶を、どのようにすくい上げ、そして折り合いを付けるかという試みに言及しました。彼女が熊本を訪れ、その印象をもとに構成した作品は、極めて個的な思い出に始まり、それが普遍性を帯びた人間の記憶へと転化していく、ダイナミックな装置であるといえるでしょう。

そして、voceという、「声」を意味するイタリア語のタイトルが象徴するように、鳥やセミを霊的な存在として捉え、そして、テーブル、照明灯、真空管ラジオといった物質に、その「声」を透過させ、「世界」の、そして「歴史」の本来の肌触りのようなものを、私たちに回復させようとします。

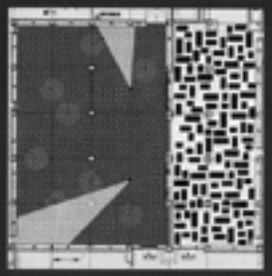
脳に障害を持って生まれた大江光さんが始めて言葉を発したのは、彼が6歳の夏。何かを思い出すかのように、子守歌がわりの鳥の鳴き声を収めたレコードを聴きながら、「クイナです」といったのだそうです。つまり、鳥の鳴き声に何かの「声」を聴き、そこに言語、つまり世界が追いついたというわけなのです。私たちはこのアン・ハミルトンのvoceに、一体、何を思い出すことになるでしょう。

CAMKレクチャーカレッジ2 「アン・ハミルトン 熊本映像日記」2006.3.19

当館学芸員の坂本麗子が、アン・ハミルトンの新作「ヴォーチェ」が制作される様子を、約100カットの画像と2本のムービーで紹介しました。アンの爽やかな人柄が透けてみえるようなリラックスしたオフ・ショットや、アンが実際に阿蘇で蝉の声を収録している際の映像、また真剣なまなざしで展示プランを検討している様子など、展覧会がどのようにして作られてきたのかを、追体験できる内容となりました。

CAMKレクチャーカレッジ3 「アン・ハミルトン 素材と感覚」2006.4.2

当館学芸員の本田代志子が、開催中の「アン・ハミルトン voce」展を構成する素材であるテーブル、布、ポリシート、ケーブルや、身体の一部を切り取った映像、声が、これまでの作品とどのような手法的つながりをもっているかについて話しました。作品に触れて、空間に入り込んで、感じとられる身体的なかすかな反応に気づくことが、自分と他との関係性を明らかにする重要な契機となっているといえます。



春休みアニメ上映会「トムとジェリー アカデミーコレクション」
2006.4.1

春休みアニメ上映会と題して、「トムとジェリー アカデミーコレクション」がアートロフトで開催されました。当日は130名もの親子連れで大賑わい。トムとジェリーのどたばた大ゲンカに笑いの渦が巻き起こり、楽しい時間となりました。(E.Z)

講演会「野鳥を楽しむ！くつろぎの時 ー歌声響き 夢ふくらまそうー」
2006.4.23

日本野鳥の会熊本県支部の事務局長である田中忠さんに、熊本の野鳥についてお話いただきました。田中さんには、開催中のハミルトンvoce展でも、熊本の鳥について数多くのアドバイスをいただきました。山から海までの多様な地形でみられる鳥の特徴をわかりやすくお話くださり、周りの鳥の世界に耳を澄ましてみようという気持ちになりました。

ワークショップ
~Yukiko Voice~　心の声がきこえますか

3月12日に、ヴォイストレーニング・ワークショップを開催しました。コンセプトは「自分の声で元気になろう！」、講師は小山祐喜子さんでした。
ストレッチをしたり、あくびをしながら声を出したり、息を勢いよく吐きながら歩いたりとさまざまなエクササイズをし、最後は全員で歌を歌いました。
今回体験したのは、「声を出すことで、体が起きる（体の感覚が目覚める）」ということ。普段意識することのない自分の声が教えてくれる感覚に、耳をすましてみる。参加したみなさんそれぞれが、すこし元気を取り戻されたようでした。
ワークショップのあと、アン・ハミルトン展の展覧会場で、その感覚をさらに展開させた方も多く見られました。(K.K)

CAMK春のピアノコンサート
2006.4.30

熊本市現代美術館の名物、毎晩7時から行なわれているホームギャラリーコンサートのピアニストたちが一堂に会してのピアノコンサートが開催されました。現在登録していただいている約30名のピアニストの中から今回は16名（うち2名はピアニストの娘さんが飛び入り）が参加。ピアノを弾く前にそれぞれにコメントをいただいたことで、観客とピアニストの距離が縮まり、アットホームな空気が流れる中、飛び入り参加の姉妹が覚えたての曲を披露し、和やかなうちにコンサートは幕を閉じました。
「図書の空間にピアノがあるのはとてもいい雰囲気だと感じました。昼間にこのような企画があると子どもも連れて来れるので助かります。音楽をもっと身近に感じられるよう、今回のようなピアノ愛好家の方々の演奏を聞ける機会がたくさんあったらいいなと思います。みなさんとてもいい演奏でした（アンケートより）」(E.Z)

GIII.vol.38（2006.3.29－5.28）
「naonao's こんな2人、」（こんなふたりてん）

熊本在住のグラフィックデザイナーである吉原尚子と森川尚美のユニット、naonao's（ナオナオズ）の活動を紹介する展覧会。naonao'sの作品は、紙や布やビニールといった身の回りにあるものを素材にすることからもわかるとおり、その多くは普段の生活空間の中から発想されたものです。アートが生活を離れてはありえないこと、また生活を楽しく豊かにしていくのがアートであること—naonao'sの作品に触れるとき、私たちはアートが私たちの日常にもたらす、大きな喜びを感じ取ることができます。
5月5日のアーティストトークからも、お互いがお互いの個性を尊重して、二人三脚で、気取らず、無理せず、自由に展開しているユニットであることが伝わってきました。ちなみに、トーク当日のふたりの衣装は、会場内のすてきな人形とお洋服がおそろいでした。(K.K／H.T)

●新収蔵作品の紹介
平成17年度の収集作品は、購入53点、寄贈34点の計89点となりました。今回の目玉作品は、約100年ぶりにアメリカより里帰りした安本亀八の《相撲生人形》です。この迫力ある作品は、6月24日から開催される「反近代の逆襲Ⅱ 生人形と江戸の欲望」展で、熊本初公開されます。平成17年度の展覧会関係では、横尾忠則《踊るデュシャン、弾く激石》など油絵5点、横尾氏デザインの宝塚ポスター15点のほか、草間彌生の巨大なインスタレーション《宇宙の心》。また、熊本を代表する画家、堅山南風の《婦女観花之図》、当館のカフェ・レガルの壁面への公開ドローイングの模様を収めた、李禹煥のDVD《correspondence》などを収蔵しました。今後、これらの作品は、コレクション展などを通して折々に紹介していく予定です。(A.S)

●館内無料スペース、展示替えしました
当館は、美術館にご来館いただいたすべての方に、美術作品に触れ合っていただきたいとの想いから、無料スペースにて館蔵作品を紹介しております。今回は美術館開館以降の購入・寄贈作品を中心に展示いたしました。なお、梅本妙子《無題》は、昨年度寄贈作品で、今回が初公開となります。ただいま、展示作品をよりよく知っていただくためのガイドブック（無料）を準備中です。お楽しみに！(H.T)

●井手宣通記念室、展示替えしました
このたびの展示は、青春期の作品、春の景色に焦点をあてております。青春期の作品における若々しい感性あふれる画風をお楽しみ下さい。あわせて、さわやかな陽光を画面にとどめた春の風景画をご紹介いたします。今回から作品のみどころなどを紹介した出品作品目録を設置しました。そちらも是非ご覧下さい。(H.T)

SUITOTTO Kumamoto

［スイトット・クマモト］

本年度のスイトット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。
（インタビュアー・構成：藤座江美）

＊いける＝花を生かす、ことと考え、ここでは「生ける」と表記します。

【いけばな松風編】

お話をお聞きしたのは小柄でしゃきっとした印象の内尾応栄先生。いけばな松風の特徴は、初代の先生が絵をお描きになる方だったということで、絵を描く気持ちで花を生けることを試み、線条と色彩を立体的に水盤に構築するという点。「花」を「画材」と捉えて生けられた花を見ると、テーマ性や生ける人の個性がより強く現れるような気がしてくるのが不思議だ。絵の具のように色を混ぜて表現することができない分、花材の色の組み合わせや色の強弱、質感によって表現しなければならないとなると、規制も多いが逆に表現の幅も広がるような気がした。2代目の先生は「植物の持つ自然の風合いを人間の生活にもたらしその中から雅びものを作り出す暮らしの花」ということを一番に大事にされ、現在の家元は古代を守りつつ時代と共にお花も生けようじゃないかとおっしゃっているということをお聞きし、いけばなが時代に対応して受け継がれてきていることを実感するとともに、続けていくことの難しさも感じ、これからのいけばながどう変化していくのか楽しみな気がする。

観光地でツツジやモミジなどを見るにつけ、「これはこういう風に生けたらなどとすべて花材に見えてしまいます」と笑いながら話される半面、ご家庭で一輪の花を生けるにしてもいかに美しく見えるか考え生けているという話を聞くと、先生は根っからの華人なのだと思った。いけばなとは「人間性を磨く行為」と語られた先生のついつい生けてしまうお好きな花は鉄砲百合らしいが、私が受けた印象を花に例えると、杜若のようだと思った。

熊本の華人展vol.2生け込み風景

【池坊編】

熊本の華人展vol.2生け込み風景

熊本には4支部あり、それぞれの支部長の小夏一耕先生、松井宣澄先生、亀甲時子先生、後藤みさ系先生にお話を伺った。池坊の特徴をお聞きしたところ「つぼみの芸術」とひとこと。つぼみの美しさはもちろん、草木の生まれてから散るまでのすべての美しさを表現できることや草木を見て自分の心を述べることだと言われ、花開く前のつぼみの美しさを第一に挙げられたことにはっとさせられた。また伝統の池坊といわれることに対して伝統以上に革新があると言われた点。歴史があること＝古いと思われがちだがそうではなくて、広がっていくということは革新の連続だと言われる言葉の重みが、いけばなの祖と言われる池坊だからこその言葉なのだと感じた。生けることで自己主張できるのがすごく快感だと楽しそうに語られる松井先生。美しいものはすべて花で表現される、その花に触れられるということはとても嬉しいことですと語られた亀甲先生。生けるという行為には花と一緒になれること、花と同化できるといううれしさがありますと語られた小夏先生。花と対話すること、語りかけることを大切にしている語られた後藤先生。にこやかに、また楽しそうに語られてはいるものの、後継者不足という現在の課題について対応策を考えていらっしゃるかお聞きしたところ、学校のいけばなクラブや、子ども教室に力を入れていて、「いけばな」というよりは花を好きな子どもを増やすことがひいてはいけばなの後継者を増やすことになると話される表情からは、次の世代へと引き継いでいかなければならない使命感をひしひしと感じた。それぞれの先生方へついつい生けてしまうお好きな花をお聞きしたところ、小夏先生は「梅」、松井先生は「水仙」、亀甲先生は「杜若」、後藤先生は「紫のフリージア」とのことだったが、お話を伺って私が受けたそれぞれの先生の印象を花に例えると、小夏先生は「柳」、松井先生は「アンスリューム」、亀甲先生は「チューリップ」、後藤先生は「ミニバラ」のようだと思った。

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ　アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介いたします。

◇ハッピー・ホーム展アンケートより

・何を表現したいのか理解に苦しむ作品もいくつかありましたが、あとで解説を見て「ああ、そうだそうだ」と感じることもしばしばでした。私は市内から遠くに住んでいて、小さい頃もこういう所に行く機会も有りませんでしたが、美術の時間に見た以上の作品を楽しみにしております。（52歳・女性・熊本県）

◇アン・ハミルトン展アンケートより

・共感できる／できない、よかった／わるかった、1,000円は高い／安いなど、意見が2つに分かれそう。私自身はよかったと感じた。異化された時空の中で、ひととき、「人間」から「動物」に戻った気がした。（44歳・男性・東京都）

・今、自分がどの時空間に身をおいているのかわからなくなりました。鳥やその他の音や映像をきいていると懐かしい記憶がよみがえりそうになるのですが、音や映像が空間を自由に動いているせいか、私を同じ場所（時）にとどまらせてくれません、着物も写真もそこに在るものなのに私の中の記憶は鳥のように飛びまわります。とても不思議な体験でした。（36歳・女性・熊本市内）

・幸せな時間をすごせました。定期的に日常でもこんな空間で過すことができればよいのにと思います。（40歳・女性・福岡県）

・「これはこんなもの」「美術とはこんなもの」という人の固定概念を崩してくれる感じ。簡単に言えば「よくわけがわからない」ものもあるけど、自分がよくわからないのが心地よく思える。熊本という地方にこんな美術館はとてもうれしい。全然テーマと違うかもしれないけど、人のイマジネーションは何よりもエネルギーが強い。あんなコードがたくさんぶら下がって白いなんの飾りもない壁の空間の中、展示物にはビニールがかけてある…でもずっと人の鳥真似の声を聞いてると、どうしても自分がどこか山の中や森の中にいる気がしてしょうがなくなりました。そういう風に感じさせる空間を作ったのがすごいと思う。まさに人の体の中から感性が湧いてくる空間だと思う。それは無機質だと思っていたビニールの中のものが代々継がれてきた着物だったり、人が触れ合ってきた（長年）物体だったからというものあるかもしれない。とてもステキな時間を過せました。ありがとうございました。（30歳・女性・熊本市内）

・初めての経験で新鮮だった。観るだけでなく今回みたいな参加型の展示も楽しいと思う。（60歳・女性・熊本市内）

・はじめに鳥の声を聞く前は人工的なものを感じましたが、鳥の声を聞きながら、さらに回ると深い森にいるようで心の内のなにかが呼び起こされる不思議な感覚でした。（19歳・女性・熊本市内）

・福岡県より来館7回目で、たいへん気に入っている。前の宮島さんの展覧会より分かりやすかった。やっぱりいろいろ見比べなきゃ分からない。よそと違うものを見せてください。（50歳・男性・福岡県）

・熊本へ作家が来て、そこで得たものでつくられた作品ということで、この場所でみれてよかった。熊本という場との関係性をとても感じられた。遠くから来たかいがありました。（30歳・女性・千葉県）

・好き嫌いのはっきり分かれる展覧会だと思いますが、私は今まで見た中で一番心地よかったです。何度でも来たいと思いました。久しぶりに頭を空っぽにすることができました。（40歳・女性・熊本市内）

・現代の芸術のメッセージ性の代表例として、面白く鑑賞しました。意欲ある企画に、敬意を表します。案内してくださった職員の方の的確なアドバイスが特によかったです。（71歳・男性・宮崎県）

・人間の心理の中にひそんでいるものを思い起こすような感覚。人間が自然の一部である事を確認させてくれる空間でした。（47歳・女性・熊本県）

・展覧会は見るもので感じるものが多いが、今回は「耳」で感じ「目」で感じ及び「歩いて」感じと、体感形式なのが良い。自分自身がもっと自由な発想で色々なことができる可能性を感じることができた。（34歳・男性・熊本県）

●展覧会鑑賞グループ・ツアーのお知らせ

10名以上のグループで鑑賞の場合、学芸員による企画展の解説案内をいたします。展覧会チケットが必要です。お早めに電話で日時をご相談のうえ、お申し込みください。○ご予約電話番号：096-278－7503・7504

●アート・キッスレター郵送のご案内（有料）

毎号確実に入手されたい方、遠方に御住まいの方に、ご希望に応じて直接送付いたします。郵送料は各号1部につき90円（年間購読を希望される場合は540円）、切手にてご送付ください。各号とも発行直後にお送りいたします。複数部数の送付を希望される場合は、お問い合わせ下さい。

ART de GYAN!

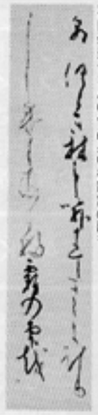
[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう？」の意です。

[MARCH-MAY] 2006

「第46回白鷗書道会　併催：白鷗六人展」

2006.5.2-5.7　熊本県立美術館分館　熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

白鷗書道会展は46回をかぞえ、県下で最も多い「かな作家」達のグループ展である。
故、中村龍石さんのあとをつぎ中村天香さんが会長をつとめている。今回は「古今和歌集」と「百人一首」を役員作品として展示し、選抜会員による6人展も併催した。九州はじめ関東などの会員約300人が1点ずつ出品していた。天香会長は「古今和歌集」の4首をすばらしい古代料紙に書いて見せていた。田内研水さんは右半分にうたをまとめ、左半分をあけた余白の生かし方がうまい。那須球石さんは紀友則の歌を5行にまとめ、うまさを見せている。井上清江さんは光孝天皇の歌を調和体で素直な線でおさめている。中村天馨さんは躬恒の歌を自分なりの調和体で見せていた。
併催「白鷗六人展」
石田寿美子さんは中村憲吉の歌を大胆な線で大きくまとめていた。野口江石さんの「碧巌録」はりきまない素直な線質が魅力である。井手美代子さんの「続古今和歌集」は潤渇のきいた連綿で見せていた。堤久美さんの「一の谷の軍破れ　」の調和体は、自分流に自然な筆使いで見せる。上田梅玉さんや松岡小寿さんもそれぞれに臨書と創作を7点ずつ展示していた。(S.K)


石田寿美子さんの作品《中村憲吉の歌》

「友遊油彩展」

2006.4.12-4.18　ふれあいギャラリー　鶴屋東館8F　熊本市手取本町6-1　TEL356-2111(代表)

友遊油彩展というタイトルの通り、みんなで遊ぼうという気持ちから皆さんが作品を持ち寄り展示した作品展。油彩、水彩、日本画とそれぞれの得意分野の素材を使い、画題も様々だ。三人の出品者の方からお話を伺った。山口さんの日本画の作品にはキャプションがない。見てくれる人はそれぞれにタイトルをつけてほしいという願いからだ。日本画特有の色彩、花と背景とのコントラストがとても印象的だった。松田さんからは1点1点制作の際のエピソードを聞き、作品ひとつひとつに込められた想いを知るにつれて、松田さんの絵に対する愛情を深く知ることができた。枡田さんは今回はご主人が亡くなられてから自然と描くようになったという男女が抱擁しあう抽象画シリーズと風景の中にたたずむ椅子のシリーズを出品。手作りの額におさめられた作品からは、愛情、優しさが感じられた。手作りの額の味わいはとても温かいものだった。(N.I)

左から山口さん、舛田さん、松田さん、鶴田邦男さんの作品の前で

「絵画グループ　グレイズ展」

2006.4.25-4.30　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

NHK文化センター絵画教室の有志によるグループ展。それぞれが自由な題材を選び、コラージュ、油絵などの表現を使った多様性のある作品展であった。なかでも山崎和子さんの《石組み》はダンボールや布を用い、それぞれの歴史の層を表出するかのように、一つのまとまりのなかに見られる個の存在を力強く表現していた。井上彬さんの「こもれ日の表現に苦心した」という《欅》は、色面を分割、明度の高い色を配置し、単色の木々を後景に並べ対比させることで、プリズムのようなきらめく光を軽やかに描き出していた。(Y.H)

井上彬さんの作品《欅》

「第2回花桜会作品展」

2006.5.9-5.14　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

尚絅短期大学同窓会の33名による作品展。家政科出身の腕前を生かした、染めや組紐、刺繍、パッチワークなどのクラフト作品が幅広く充実しており、会場はさながら素敵なお宅に招かれたかのような優雅さだ。絵画も下田照美さんの油絵など、レベルの高い作品が並んだ。(A.S)

第2回花桜会作品展

「米村聴雨書作展」

2006.4.5-4.10　アートスペース大宝堂
熊本市上通5-6　TEL354-2155

書道界での育ちは、国定教科書筆者で有名な井上桂園門下で旧文検の最後を飾った人であるが、早くから世阿弥や利休や良寛に惹かれて、書を読み、茶をたしなみながら書道を楽しみ、心を飄逸の世界に遊ばせた米村聴雨先生の米寿記念展である。
週2回の透析の合間に準備を進めたそうであるが、若い時から人一倍の勉強で知られたかたであったから余裕さえ感じられた。
飄然たる表現様式もさることながら、取り上げられた題材に学の深さが伺えて、その生き様に慕わしいものを感じる楽しい書展であった。(TM)

「熊本県支部　草月いけばな展」

2006.4.28-4.30　熊本阪神8階催場及び辛島公園地下通路
熊本市桜町3-22　TEL322-1111

草月創流80周年記念いけばな展が、「和・輪・環∞草月熊本」のタイトルのもと開催。辛島公園地下通路に設置された竹を使った大作は、場所柄若干重たい感じになってはいたが、迫力があり、通ゆく人に爽やかな風を感じてもらえる作品になっていた。草月＝造形というイメージを打破したかったというお話のとおり、生花が中心でアクリルのみ、などといった作りこみの作品はなく、会場は暮らしい色とりどりの花々であふれていた。またベテランの作品だけでなく、ジュニアからレッスン中の方々によるコーナーもあり、それぞれのレベルでの表現方法を見ることができ新鮮だった。いけばなを知らない人にまず知って欲しいという思いから体験コーナーを設けたり、他県からの協賛作品もあったりなど、「和・輪・環∞草月熊本」のタイトルが忠実に現れている華展だった。(E.Z)

熊本県支部草月いけばな展

「みどりのそよ風、いい日だね！」

2006.5.2-5.7　熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35　TEL324-4930

後藤緑さんが主催している顔料友禅の教室で制作された作品の展示。着物以外にもTシャツ、タペストリー、コースターやこれからの季節にはかかせない日傘など素材は様々で、藤やかきつばた、カラーなどの花が涼しげに描かれていた。生地に直接描くだけでなく、型やシルクスクリーンを用いた簡単な制作方法もあるとのこと。ビニールやナイロン以外ならほとんどの生地に描くことができるそうで、後藤さんの作品の中にはレース生地のものもあった。「レース生地は隙間から顔料がぬけるので何度も色をのせました」と制作の際のポイントなども語ってくれた。「遊び心で」とかわいいピエロを描いた作品もほのぼのとした雰囲気を演出していた。
顔料友禅の他ステンドグラスの材料で作ったアクセサリー、陶、ちりめんの人形や八代の作家によるい草の和紙の作品も展示されており、初夏の季節を爽やかに彩っていた。(A.T)

展示風景

「書団連選抜臨書展」

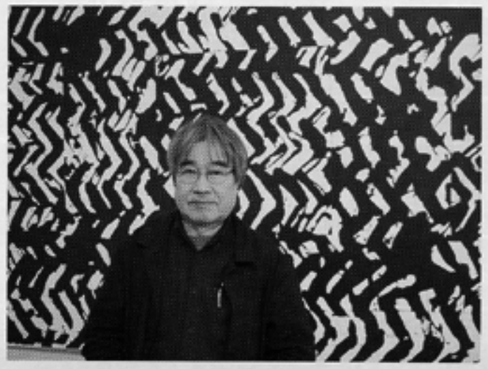
2006.3.7-3.12　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

全国書道団体連合会九州総局(鳥飼孝一代表)が主宰する個展の臨書展で、臨書に限定した展覧会は珍しいと言える。
華やかな技法による自己主張も注目すべきだが、古典の勉強による伝統の重みも大切にしていこうという姿勢である。各団体から選抜されたメンバーが日中両国の歴代の名作や個性あふれる快作に各自思い思いの取り組み方をしている。
約三千年前の中国古代文字から、日本独自の繊細流麗な上代様式(平安)を挟んで、日本の近代まで内容が豊富で、写実的な臨書から表現的な臨書まで、表現様式にも変化が見られて、参観者を楽しませていた。
中国日本とも時代順に展示してあり、書道事典類の分厚いコピーを資料として入場者に配布してあったので、中には時間をかけて丁寧に資料に目を通して、会場当番に質問をしながら熱心に観賞する人も居た。(T.M)

「森山裕之展」

2006.4.10-4.20　ギャラリーキムラ　熊本市水道町3-5(上通Kビル8F)　TEL327-0166

1963年からパリに在住する森山裕之さんの個展。森山裕之さんは若き日に海老原喜之助に師事してから、絵画制作活動にまい進し続けている。今回の個展は渋谷のBunkamura Galleryにて開催された「Parisの8人展　メルキュールの夕べ」に出品した新作などを熊本でも紹介するもの。
本人に作品の描き方を聞いてみたところ、「大きな作品は床に寝かせて描きます。即興性があるのはもちろんですが、その前にエスキース(習作)を制作し、構想を充分に練ってから制作を始めます。基本的に絵画の天地を決めてから描きますが、天地を逆にひっくり返して完成としたこともあります」とのこと。「く形」や「点」が多く作品に見られる点については、「これはね、記号なんですよ」とにっこり。今回発表の作品には、細い溝を画面に刻み込んだものも多く、新たな展開が見られた。
森山さんの作品については熊本市現代美術館収蔵作品《無題》を当館のフリーゾーンで紹介している最中である。(H.T)



WORLD NEWS

「Whitney Biennial 2006 Day for Night」ホイットニー美術館(ニューヨーク)2006.3.2−5.28

今回のホイットニー・バイアニュアルは「Day for Night」とタイトルが付けられた。これは映画撮影で、レンズにフィルターをかけて昼間の撮影でも夜のシーンに見せる手法を指す語である。また、展覧会カタログのキーワードは「星の王子様」の一節である「羊の絵を描いて」。作家がこの二年間を一つのイメージ、単語、テキストに結晶化させたポスターが、99枚折り込まれ、視覚的なエッセイが集積されている。

出品作のなかでは、ピエール・ユイグの《A Journey That Wasn't》は、フエゴ島とニューヨークのセントラル・パークで撮影された映像を用い、映し出される空間と物語が交錯するものであった。

このようなタイトルや手法に照らしあわせてみると、出品作は、ちょうど映画の場面を切り取ったかのように、ナラティブで、オープンエンドな要素が引き出されていたといえよう。作品相互の関係性、その行間に意味が与えられ、作品の現実と虚構の間にあるフィルターの存在を改めて考えさせるものであった。(Y.H)

第4回ベルリン・ビエンナーレ(ベルリン)2006.3.25−5.28

今回はアーティストのマウリツィオ・カテランらの3人のキュレーターによる企画で、ベルリン・ミッテのアウグスト通りの12箇所の地点で70人の作家の作品が展示された。クンストヴェルケ、教会、墓地、かつてのユダヤ女学校、プライベート・アパートメント等を訪ね歩き、作品とその環境である空間の歴史を深く感じさせる構成で、社会における個の存在の温かい力強さと、不安に満ちたはかなさを同時に伝える、人の手で生み出された作品であるとの印象が強く残った。(Y.H)

ベルリン・ビエンナーレにて
Peter Coffin,Untitled (Rainbow),2005

Letters from CAMKEES

熊本市現代美術館は、約260名のボランティアスタッフ「CAMKEES(キャンキース)」によって支えられています。

第1回目は、新聞切抜きボランティアさん(活動:週2回、登録13名)をご紹介します!新聞切抜きボランティアさんには、全国紙と地方紙から国内外の芸術文化記事を切り抜き、一覧できるようにファイルを作成していただいております。さて、活動中の皆さんにお話を聞くと 。

●Topic.1　新聞とのかかわりについて

「新聞の読み方が上手になりましたね」「そうそう!新聞の面白さを知りました。待合室や図書館で、新聞を読むようになりましたよ」「全国紙、地方紙と様々読み比べて、新聞の特徴や傾向が分かってきました」「ボランティア活動で気になった記事を、家で改めてじっくり読むようになりました」「本当にぜいたくですよー」

●Topic.2　活動を通して得た広がりについて

「実は 料理のレシピが増えました(笑)」「旅行が趣味なので情報がたくさん入ります」「全国の美術館や展覧会、作品についても知識が深まりました」「新聞を切り抜きながら、本や映画、料理などの話題をひとりが出すと、ぱっと会話の輪が広がって、メンバーとともに楽しく対話ができるんです」「「時には政治批評、社会批評を皆でディスカッションしますよ」「おかげで、ボランティアで始めて知り合ったのに、全員で和気あいあいとしていますよね」「それにしても、自分から参加するって大事ですよね。様々な場所で得た知識がふとひとつに繋がる瞬間の喜びってありますでしょ?そういう、知の喜びを獲得する場所でもありますね」

●新聞切抜きボランティアさん担当スタッフN.Iより

新聞切り抜きや資料整理はたいへんなお仕事ですが、活動されているお部屋からはいつも楽しそうな笑い声が聞こえてきます。皆さんお互いに気遣い、話し合いをしながら、新聞切り抜きの腕を日々磨かれています。CAMKEESの縁の下の力持ちチームです。

ooh-vanguard! 大番外

当館学芸員が心動かされた芸術・文化の動向について語りあうコーナー、「大番外」。

第1回　『テヅカ・イズ・デッド』を語る(金澤韻×冨澤治子)

2006年7月17日(月・祝)、『テヅカ・イズ・デッド』の著者伊藤剛(いとうごう)さんが来熊します!

○トーク・ショー「キャラクター文化と生人形」
○ゲスト:伊藤　剛(漫画研究家)
　　宮本大人(北九州市立大学助教授)
○司　会:金澤　韻(川崎市市民ミュージアム学芸員)
○14:00−15:30、於:熊本市現代美術館ホームギャラリー

無料

書籍データ:
伊藤剛「テヅカ・イズ・デッド−ひらかれたマンガ表現論へ」、NTT出版、2005年　●定価(本体2400円+税)

K:『テヅカ・イズ・デッド』＊1という、マンガ研究の画期的な本が出ました。この本の内容にはいくつかポイントがあるんだけど、一番の衝撃は、「キャラ」と「キャラクター」を分けて考えたところだったよね。キャラクターは人格を吹き込まれる以前に「キャラ」、「絵」なのだということですね。そのすごく分かり易い例として伊藤さんは手塚治虫の「地底国の怪人」を出しているんですが、よくこんなぴったりの例を探したなあと私は感動したよ。ウサギが亜人間として描かれ、最後に「絵」であることを忘れて、人格を吹き込まれた「キャラクター」へと変貌するっていう。このトリックで、私たちは「マンガは『キャラクター』こそが命」だと思い込まされてしまった。伊藤さんはマンガ研究をすすめるための概念モデルとしてこの話を導き出しているのですが、私は「キャラクター」以前にある「キャラ」というもの、その存在自体にかなり魅力を感じました。で、今日はやはりこの本を読んで感動したというピアズリー研究者の冨澤さんと、「絵」/「キャラ」についてお話していきたいと思います。
ちょうどいいことに、ピアズリーの「サロメ」が「キャラと絵は違う」という例として出されていますね。伊藤さんは、「サロメ」は「キャラ」じゃない、絵だと言っています、ここですね…「この図像自体が『サロメ』という人格の存在感を担っているわけではない」…ここは、ピアズリー研究者としてはどうなの?じつは、これが「キャラ」か、「キャラ」でないか、ってけっこう微妙な問題のような気がするんですけど。確かに、「サロメ」はキャラとしてひとり立ちするには弱い。でも確かに「絵画」より「キャラ」に近い。その違いを掘り下げてみたい気がする。

T:微妙なんですよ 。本の中で「サロメ」と紹介されているのは、《孔雀の裳裾》という作品で、挿画『サロメ』の連作のひとつです。『サロメ』の代表作というわけではなく、作品群のなかでも大人しい作品で、なぜ伊藤さんがこの作品を選んだのかは是非お聞きしてみたいところです。通常サロメは、ヨカナーン(洗礼者ヨハネ)の首をアトリビュート(持物)＊2としています。そのアトリビュートがないから、《孔雀の裳裾》におけるサロメはこの作品を離れて「キャラ」として自立することは出来ない。ヨカナーンもアトリビュートとしての毛皮の衣服を着ていないから、本当にこの2人がサロメとヨカナーンなのか、そしてどちらがどちらなのかも分かりにくい、「キャラクター」すら揺らいでいるわけです。《孔雀の裳裾》は登場人物の「キャラ」も「キャラクター」も薄いので、オスカー・ワイルド原作の挿絵なんですが、むしろピアズリーの「絵」なんでしょうね。
それと同時に別の挿画では、ワイルドが原作で全く言及しない「キャラ」を勝手に脇役としていっぱい登場させてしまう。『サロメ』に限らず、胎児みたいのをいっぱい描くんだけど、これは完全に「キャラ」で、手塚治虫のヒョウタンツギみたいなやつなんです。これはなんにも物語らないし、ストーリーの文脈に何らかの影響を及ぼす訳でもないけど、ビジュアル的にインパクトがある。
そういう意味で、ピアズリーのイラストレーションは、「キャラ」と「キャラクター」がひとつの画面に混在している感じが強い。ちなみに胎児みたいな「キャラ」は、3年間ぐらいにわたって別の媒体にも続けて登場していたりするので、そのキャラの発生と消滅について論文が書かれている。

K:スターシステム＊3みたいだね、持ち役者がでてくるんだ。おもしろいね。

T:ああ、スターシステムか、全然気付かなかった!
60年代、70年代の少女マンガとか、あと最近確認したのは『輝夜姫』や『パラダイスキス』、『花より男子』にもあるんだけど、ピアズリーとかミュシャとかの絵に惹かれて、自分のマンガ作品のなかにそのまま抜き出しで作者が描き込んだり、パロディが行われている。プロが商業紙の紙面のなかでやっちゃうんだよね。それは、ピアズリーたちの線画の強度に対する尊敬の念とか、彼らのイラストレーションの様式を「自分で再現したい」と思うからで、同じものをつくりだしたいという強い欲望を引き出すというか。その欲望っていうのは、「キャラ」の特徴にも繋がってくるんだよね。
ピアズリーとかミュシャとかだと、そのイラストレーション様式そのものが「キャラ」化していると考えられるような気もする。

K:「ユリイカ」1月号＊4の「『キャラ/キャラクター』概念の可能性」では大石内蔵之助や丹下左膳もキャラか?という話が出てくる。じつはこの話にはあまりピンとこなかったんだよね。どう思います?

T:眼帯付けたり服装指定があるから、ビジュアル・イメージは大切なんでしょうね。でも原作がテキストというのもあるから、伊藤さん日くの「キャラクターは立っているけど、キャラが弱い」が当てはまるような 。キャラとしてのビジュアルの強度は低めかも。

K:そうだよね。そういう物語出身のキャラより、マンガとか、もともとビジュアルがあって出てきたキャラのほうが、私は興味深いんだよね。若者はキャラ面のビジュアル的な面白さに創造性を感じて、クリエイティビティーが導かれて、同人誌とかに描くんだと思うんだけど。マンガに、キャラで出てきたときに、人々の創造性を喚起する力とかが生まれると思う。キャラの魅力って言うのは、別のストーリー(キャラクター)を生み出してしまいたくなるほどのビジュアルの力でしょ。
あとね、コマ運びに触れているところで、「ヒロインの『顔』を紙面にどう置くかが工夫され、コマ展開の連続性をむしろ抑制することで、デザイン的な『美しさ』が優先させられていると考えられる」と伊藤さんが言っているんだけど、これが非常に合点がいった。同じページに例として引かれている浦沢直樹は、ストーリーは読めるんだけど、この絵からなにかをもらって、この絵についてしゃべりたいとか真似したいとか、そういう作家ではないよね。

T:そうね、むしろ『MASTERキートン』は「キャラ」じゃなくて、そこに出てくる数々のストーリーのディティールに読者は萌えるんだよね。『MONSTER』は 、あの「3匹の蛙」の看板をネタに、吉崎観音が「ケロロ軍曹」で展開したパロディが印象深い(両者爆笑)。顔さんの言葉を借りると「別のストーリーを生み出してしまいたくなるほどのストーリーの力」、でしょうか?

K:書きたいストーリーがあって、マンガでそれをどう表現しようかとなって、だんだんマンガ表現が発達してきた、というのは一面的な見方で。出来てきたマンガ作品から別の創造性が喚起されて、萌えマンガが発生していく、ビジュアルがページ構成すら作り上げていくという方向性が伊藤さんによって見出された。ほんと、マンガのビジュアルってすごいものがあるのではなかろうか…。
浦沢直樹みたいなストーリー重視、こっちはこっちで好きなんだけどね。でも逆に、「萌えマンガ」、こっちは買い揃えて読みたいという感じは起きないね。読み物的なマンガのほうが購買意欲をそそるし、ずっと語り継がれる。うち(熊本市現代美術館)でもあまり所蔵していないし、来館者も読み物マンガを読んで帰る。「萌えマンガ」は自分で創作するために読むとか、真似するために買うとか、そういう部分が大きいのかもしれないね。

(注)
＊1.伊藤剛著「テヅカ・イズ・デッド」、NTT出版、2005年。
＊2.Attributes芸術作品に表される人物が誰であるかを示すために、慣用的にその人物と結びつけて表現される品物。オックスフォード西洋美術事典、講談社、1989年より引用。マンガでの具体例を挙げると、ラムちゃんを表現するときの、頭の角や虎の毛皮模様柄のビキニとブーツなどがアトリビュートにあたる。
＊3.あたかも俳優がいくつもの映画に出演し、いくつもの人物を演じているかのように、特定のキャラクターが登場人物を演じていると見立てる方法。
＊4.「ユリイカ」1月号、2006年1月号の特集は「マンガ批評の最前線」。

お知らせ

熊本市美術文化振興財団(理事長:宮川洸洋)は、平成18年4月からの3ヵ年(予定)、熊本市現代美術館の指定管理者として管理・運営を開始しました。当財団は開館当初より美術館の管理運営を開始してきましたが、今後も熊本市の美術文化振興に財団職員一同精一杯勤めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

●展覧会カタログ・ポスター等は通信販売が可能です
八谷和彦「OPEN　SKY」展ポスター(サイン入)、横尾忠則デザイン「横尾忠則展」ポスターなどは、当館でのみ入手できます。通信販売可(送料別、現金書留での前払)。

●アートキッスレターの主な設置場所の紹介
熊本市内ギャラリー、熊本県立美術館(本館・分館)、熊本県立伝統工芸館、市役所市政情報プラザ、市民病院、南部市民センター、幸田市民センター、西部市民センター、秋津市民センター、龍田市民センター、託麻市民センター、東部市民センター、清水市民センター、大江市民センター、花園市民センター、北部総合支所、鹿田総合支所、河内総合支所、天明総合支所、五福地域開発センター、総合女性センター、青少年センター、産業文化会館、中央公民館、健軍文化ホール、国際交流会館、市民会館、熊本博物館、こども文化会館、熊本市立図書館

◎当館の企画展ポスターを貼ってくださる場所、チラシを置いてくださる場所を募集しています。
お問い合わせ先:096-278−7500

[ホームページをリニューアルしました]
5月1日付けで当館のホームページをリニューアルしました。美術館の活動をより解りやすく知っていただきたいと、スタッフ全員でアイデアを出し合い、ようやくの完成です。
特に注目していただきたいのが、「CAMK Blog(キャンク・ブログ)」と「アーティスト一覧」です。「CAMK Blog」は、会場での制作風景やアーティストとのオフショットなどの裏側を熊本市現代美術館のスタッフがつづるもので、美術館のヴィヴィッドな現場の雰囲気をお伝えするものです。「アーティスト一覧」は、これまで熊本市現代美術館で行われた催し物などで関わったアーティストのデータベースです。気になるアーティスト名で検索すると、当館が発行した掲載カタログなどへ簡単にたどり着くことができます。

編集後記

今年度からのアートキッスレターは、念願かなっての片面4色刷りです。美術館での活動の様子が、読者の皆さまに、より鮮やかに伝わることを思うと、嬉しさでいっぱいです。新しいコーナーも増えました。
「Visitor's Letter」は、ご来館された皆様がアンケートに残してくださった展覧会の感想・質問を紹介するスペースです。このコーナーを通して、「ああ、この展覧会はそんなふうにも見ることができるのか」「この感想は共感できる」など、紙面を通しての交流の場としてご愛読いただけますと幸いです。
「Letter from CAMKEES」は、美術館をサポートしてくださっているボランティアグループ「CAMKEES(キャンキース)」の活動を紹介するコーナーです。スタッフの皆さんがボランティア活動を活き活きと楽しまれている雰囲気を感じ取っていただきたいと思っております。
「大番外」は、このアートキッスレターにおける「読み物」的なコーナーとして考えております。私自身、伊藤剛さんの『テヅカ・イズ・デッド』によって、眼からウロコが落ちるような体験を幾度もしました。「マンガ」の読み方、「マンガ」という表現への考え方が、格段に深まった気がします。今回の紙面のテーマにもなった「キャラ」・「キャラクター」論において、学生時代からの研究が活かせたのはうれしい驚きでした。
新年度を迎え、リニューアルしたアートキッスレターを、どうぞよろしくお願いいたします。

2代目編集長　冨澤治子

執筆者一覧　＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。
後城昌山
Syozan Kaneshiro(書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama(書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda(熊本市現代美術館学芸員)
鹿座江美
Emi Zoza(熊本市現代美術館学芸員)
冨澤治子
Haruko Tomisawa(熊本市現代美術館学芸員)
坂本麗子
Akiko Sakamoto(熊本市現代美術館学芸員)
竹田　茜
Akane Takeda(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆菜々
Nana Izu(熊本市現代美術館学芸アシスタント)

●発行元/ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.27
2006年6月発行(夏号)　◎無料◎
●編集人/南嶌　宏　編集長/冨澤　治子　●印刷/コロニー印刷
●デザイン/(有)松永　壮デザイン事務所
●発行/熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500　FAX.096-359-7892